

子どもとおばけ



坂上明子

「この中におばけいるかなあ」「靴があるね」玄關のガラス戸から中を覗きこんでいることは、園庭同様に遊んでもいいことになっている袋小路の一番奥の空き家です。

いつ頃から空き家になったのか記憶に定かではありませんが、現在、がらんとした家の中はほこりだらけで、なぜか玄關に靴があり、ガラス戸にはひびが入っています。空き家の前に立っている樺の木には春になると毛虫がたくさん現われます。子ども達の帰った後、退治するのですが、一番先に見つけるのはいつも子ども達です。

ガラス戸のひびが何とも言えず薄気味悪さを増しているのですが、実はこのひび、三年前のある日、おばけがいるかいないか確かめようということになった年長男児が空き家に向かって石を投げているうちに入ってしまったものなのです。

「おばけ出てこい！」と叫ぶ子ども達にとって、この空き家は大変興味のある場所なのです。

六月中旬のある日、私はおばけのお母さんになりました。我が

家には三匹の雌犬と二匹の雄犬がいます。大きなダンボールで作った家の窓はひびが入っています。「おばけの家って、窓がわれているんだよね」と言いながら作っていました。「毛虫もいるよね」とダンボールに毛虫の絵もかいてありました。

散歩に出かけたり、熱を出してお医者様を呼んだり、絵本を見たりするおばけの生活は人間の暮らしと全く同じでした。「ねえ先生、おばけのお母さんになって！」と誘われて始まったおばけあそびは、子ども達の大好きなままごとと同様だったわけですよ。

年長児は夏に高尾山で一泊保育を行ないました。ある年、夜の楽しい会に肝だめしを計画しました。

先ず、真っ暗にした部屋で「むじな」の話を聞きます。そして、薄暗い廊下を通して一番奥の部屋のドアに貼ってある絵を見てください。小さな胸からドキドキとなり響く鼓動が聞こえてくる様です。廊下の途中にはおばけに扮した教師が二人待機しています。

男児でも、一人で行くことは非常に勇氣のいることですから、女兒にはなおさらです。そこで、女兒は二人で行ってもいいことになりました。覚悟を決めて歩き出すとおばけらしい声が聞こえ、

シートをかぶったおばけが現われて、肝だめしは山場となります。「何だかあの声T先生の声に似ていたな」「あれはN先生がやってたんだよ」等と語り合うのは見事に一番奥まで行ってこられた子ども達の集まっている部屋での会話です。

「あれはT先生だよ。でもやっぱり怖かった。」

「おばけなんて絶対いないよ。」

「うちのお父さんがおばけはいる、って言ってたよ。」

「おばけっているのかなあ、いないのかなあ。」

等と興奮しきった子ども達の声は高まるばかりでした。

いろいろな思いを持って一泊保育を終えた年の秋、幼稚園のテラスでRちゃんとEちゃんが向かい合って真剣な表情で何やら話していました。そっと近づいてみますとRちゃんがEちゃんに怖い話をしているところでした。私も仲間に入れてもらいRちゃんの話しを聞きました。Rちゃんの話しが終わると今度はEちゃんの話。Eちゃんが終わると「次は先生ね」と言われ、話しました。次はまたRちゃんという様に次から次へと怖い話が続きました。

た。たくさん怖い話を知っていることに驚いたと同時に、おばけの興味は尽きず話し手も聞き手も目を輝かせていたひとこまを忘れることができます。

(武蔵野相愛幼稚園)